

教員養成系大学生が有するLGBTの知識・理解・学習経験に関する調査研究

— T大学におけるアンケート調査を手がかりに —

奥村 遼*¹・加瀬 進*²

特別ニーズ教育分野

(2016年9月13日受理)

1. 問題の所在と目的

近年、LGBT（レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー）と呼ばれるセクシュアルマイノリティの人々の存在に注目が集まっている。その動きの背景として、2015年3月の東京都渋谷区議会本会議における同性カップルを結婚に準ずる関係として認める条例の可決、成立が大きく取り上げられているが、国レベルでもLGBTを取り巻く諸相が人権問題として捉えられつつある（法務省・人権擁護局2015）。さらに、同2015年にアメリカの連邦最高裁判所が同性婚を認め、事実上全米で同性婚が合法化するなど、日本国内のみならず、海外においてもLGBTをめぐる状況が大きな変化を見せ始めている。

電通ダイバーシティ・ラボによる「LGBT調査2015」によると（電通コーポレート・コミュニケーション局広報部2015）、国内人口の約7.6%、およそ13人に1人の割合でLGBT当事者が存在すると推計されている。人口に換算すると国内に約960万人存在することになるLGBT当事者であるが、セクシュアリティを否定するいじめや暴力を受けた経験や、抑鬱傾向や自殺念慮の割合の高さといったような、ある種特有のさまざまな困難や葛藤を抱えていることが明らかとなっており、これまでの研究等を裏付ける形となった（日高2000, 内閣府2012）。

こうしたLGBTをめぐる問題のうち、学校教育に焦点を当てると、次のような問題が浮き彫りとなってくる。日高ら（2005）が行ったLGBT当事者を対象とした調査によると、約93%の子どもが学校で性の多様

性に関する適切な教育を受けていないことが明らかとなった。日高はまた、2013年に約6,000人の教員を対象として行った調査において、性同一性障害の子どもに関わった経験のある教員は約12%、同性愛が約8%であり、さらに教員養成課程出身の教員の回答を見ると、LGBTの学習経験は「性同一性障害に関すること」が8.1%、「同性愛に関すること」が7.5%であったという結果も得られ、数見（2011）や寺町ら（2010）が指摘するような教員養成課程における性の多様性の取り扱いに関する問題点が極めて深刻な事態に及んでいるといえる。このことは学校教育現場に対するLGBT当事者のクレーム研究からも指摘されているところである（奥村2015）。

以上より、本研究は教員養成系大学生が有するLGBTの知識・理解・学習経験の実態や傾向を明らかにすることを目的とした。

2. 方法

質問紙によるアンケート調査。回収された教員養成系T大学に在籍する学部4年生147名（社会科専攻9名、家庭科専攻20名、保健体育専攻39名、特別支援教育専攻43名、養護教育専攻10名、社会福祉専攻10名、カウンセリング専攻16名）である。なお、手続きとしては各専攻の担当教員に可能な範囲での配布・回収を依頼する、というものである。調査項目はLGBTに関する知識や理解及び態度の程度、大学におけるLGBTに関する項目の学習経験の実態等であり、調査期間は2015年11月～2016年1月である。なお、

*1 東京都立高島特別支援学校（175-0082 板橋区高島平3-7-2）

*2 東京学芸大学 特別支援科学講座 特別ニーズ教育分野（184-8501 小金井市貫井北町4-1-1）

アンケート用紙は巻末を参照されたい。

3. 結果

3. 1 LGBTに関する知識の実態

「LGBTという言葉を知っている」と回答した学生は60%であり(図1), そのうちの57%が「テレビ」を介して, 52%が「インターネット等」を介してLGBTに関する情報を得ていた(図2)。また, 加えてLGBTに関する知識の程度を尋ねると, 最も回答率が高かった選択肢は「正しいかどうかは分からないが, LGBTという言葉はある程度簡単に説明できる。」であり, 41%であった(図3)。

LGBTという言葉を知っているか。(N=147)

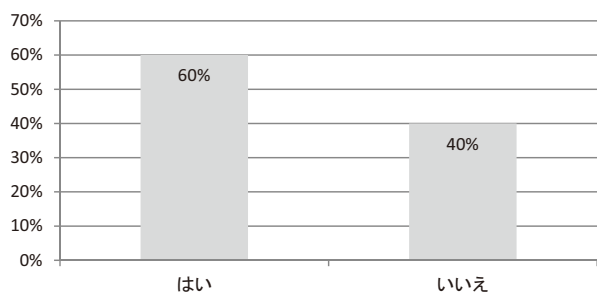


図1 LGBTの認知度

LGBTという言葉はどこで知ったか。(n=87)

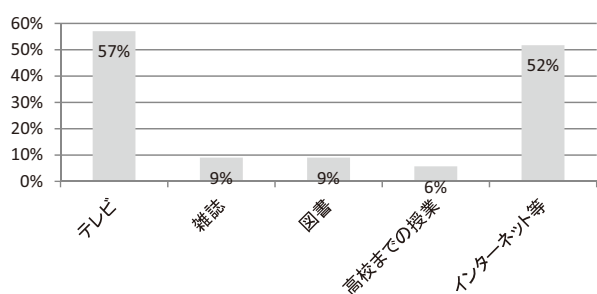


図2 LGBTの情報源

LGBTという言葉をどの程度知っているか。(n=87)

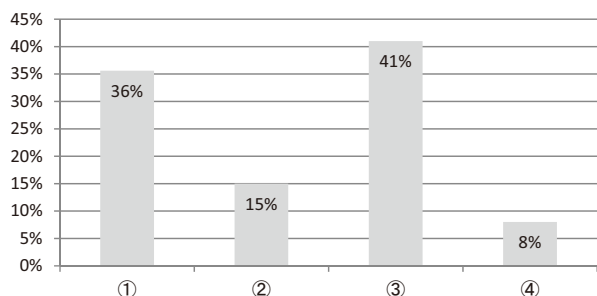


図3 LGBTの理解度

<図3の選択肢>

- ①: LGBTという4つのセクシュアリティがそれぞれ何を表すかを正しく説明できる。
- ②: LGBTのうち, どれか1つでも正しく説明できる。
- ③: 正しいかどうかは分からないが, LGBTという言葉はある程度簡単に説明できる。
- ④: LGBTという言葉を知ったことはあるが, 説明はできない。

3. 2 LGBTに対する理解及び態度の実態

家族や友人もしくは自身と関わる児童・生徒の中にLGBT当事者がいると想定した場合に持つ感情やイメージに関する問いを設定したところ, 「家族」から「友人」へ, 「友人」から「児童・生徒」へといった順に, 許容の程度が高まっていく傾向が見られた。しかし, それは見方を変えれば「児童・生徒」から「友人」へ, そして「家族」へとより間柄が親密になるほどLGBTへの抵抗感が増すことを示唆した。また, LGBTの「児童・生徒」に対して抵抗感を持つ回答(抵抗感がある, 少し抵抗感がある)はLGBTの各セクシュアリティにおいて約10%の割合で見られた(図4~6)。

家族にLGBT当事者がいた場合

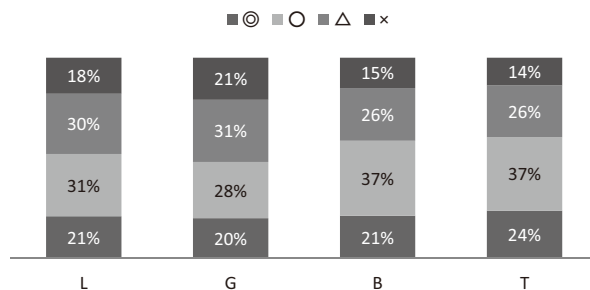


図4 LGBT当事者への抵抗感①

友人にLGBT当事者がいた場合

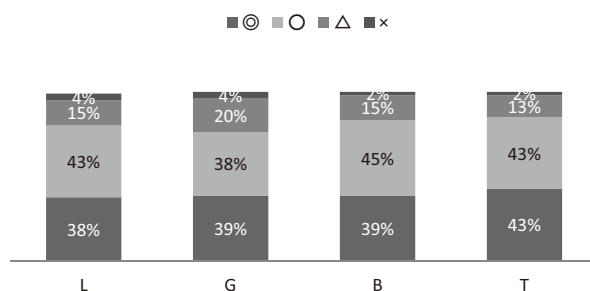


図5 LGBT当事者への抵抗感②

児童生徒にLGBT当事者がいた場合

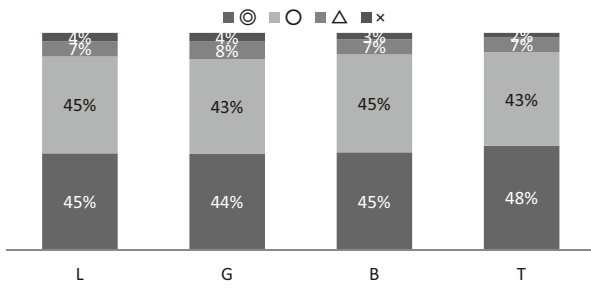


図6 児童・生徒にLGBT当事者がいた場合

<図4～6の選択肢>

×: 抵抗感がある △: 少し抵抗感がある ○: たぶん受け入れられる ◎: 受け入れられる

3.3 LGBT当事者との関わりを持った経験の実態

今までにLGBT当事者に出会う機会があったと回答した学生は37%であり、出会った場所としては「学校」という回答が73%と最も多く、その当事者は「友人」であったという回答は84%であった。また、その当事者と出会った際の感情を尋ねる問いにおいては、「特に何とも思わなかった。」や「それまでと変わらない。」といった意見が大半を占め、これに関してはセクシュアリティを特別視していない姿勢と、性の多様性に関する問題への意識が乏しい姿勢の両者が混在している可能性がある。

その当事者と出会ったとき、どう感じたか。(n=51)

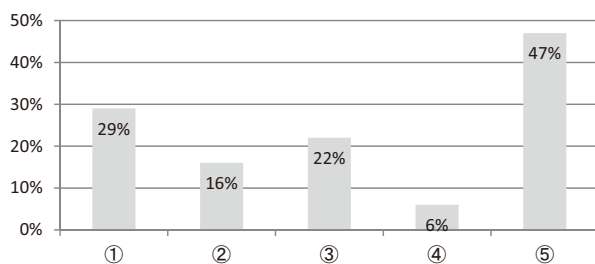


図7 当事者と出会った際の感情

<図7の選択肢>

- ①: その人とさらに仲良くなりたいと思った。
- ②: その人の悩みの相談相手になりたいと思った。
- ③: LGBTについて詳しく知ろうと思った。
- ④: その人とはあまり関わりたくないと思った。
- ⑤: その他。

3.4 大学におけるLGBTに関する学習機会の実態

大学で受けた授業の中でLGBTについてふれた経験があると回答した学生は33%であった(図8)。授業の70%が「選択科目」、51%が「専門科目」でありその授業に最も近い教科専門等の領域を問うたところ「社会科」という回答が最も高く41%という結果となった。さらに、その授業を通してLGBTに関する知識を得られたかを問うと、「ある程度得られた」という回答が65%と最も高く(図9)、その授業の必要性に関する問いに対しては、教育に携わる上で「受けるべきである」という回答が最も高い63%を占めた(図10)。加えて、LGBTに対する偏見や抵抗感の変化を尋ねると、受講後では「どちらかといえば減った」という回答が44%と最も高く、次いで「変わらなかった」という回答が40%であった(図11)。

大学で受けた講義の中で、LGBTについてふれたものはあったか。(n=137)

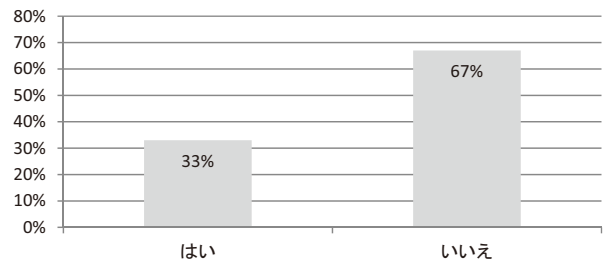


図8 大学におけるLGBTに関する学習機会の実態

その授業を通して、LGBTに関する知識を得られたか。(n=43)

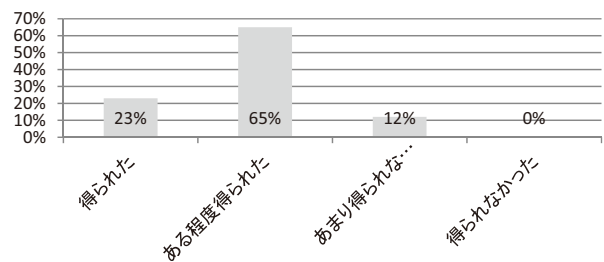


図9 LGBTに関する知識の獲得

その授業は、教員あるいは教育に関わる専門職になるにあたって受けるべきであると思うか。(n=43)

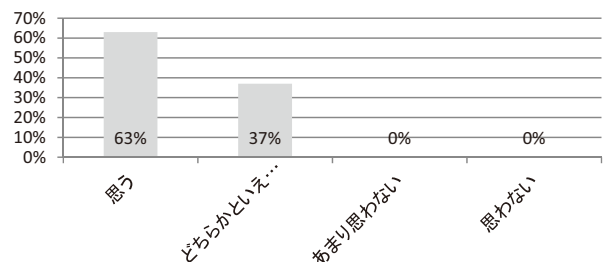


図10 LGBTに関する授業の必要性

その授業を通して、LGBTに対する偏見や抵抗感はどうか。(n=43)

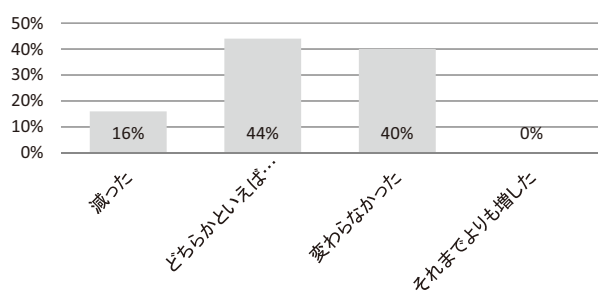


図11 受講後のLGBTに対する態度の変化

3. 5 LGBTについて学ぶ意義に対する意識の実態

教育に携わる上で大学においてLGBTに関する正しい知識を身につける必要性を感じている学生は95%と、非常に高い割合となった。また、その理由を尋ねる問いに対しては、「関わる児童・生徒の中に当事者がいる可能性があるため。」という回答が最も高い割合を占め、65%であった(図12)。一方、必要性を感じないという回答はN=6と少ないものの、その理由を尋ねる問いに対しては、「LGBTよりも重要な項目を優先して学ぶべきであると感じるため。」という回答が50%得られ、最も高い割合を占めた(図13)。

「思う」と答えた理由に最も近いものはどれか。(n=121)

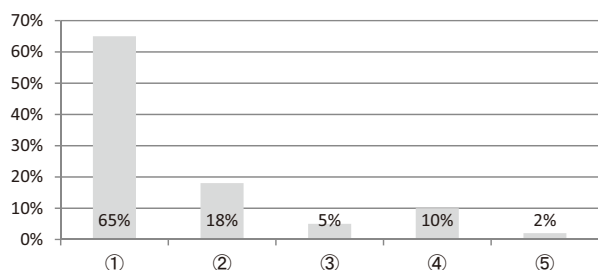


図12 LGBTについて学ぶ意義に対する意識=必要と思う

<図12の選択肢>

- ①：受け持つ(関わる)児童・生徒の中に当事者がいる可能性があるため。
- ②：いじめや人権問題に関わることであるため。
- ③：LGBTは学校教育の中で扱われるべき重要な問題であるため。
- ④：教員はLGBTについて正しい知識を児童・生徒に与えなければならないため。
(児童・生徒は大人からLGBTについて正しい知識を与えられるべきであるため。)
- ⑤：その他。

「思わない」と答えた理由に最も近いものはどれか。(n=6)

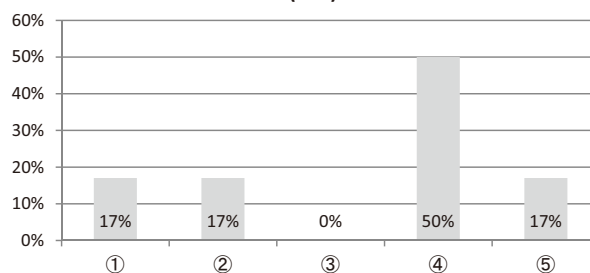


図13 LGBTについて学ぶ意義に対する意識=必要と思わない

<図13の選択肢>

- ①：受け持つ(関わる)児童・生徒の中に当事者がいるとは限らないため。
- ②：教育に携わるにあたり、LGBTに関する知識は特に必要ではないため。
- ③：LGBTは学校教育の中で扱われるべき問題ではないと感じるため。
- ④：LGBTよりも重要な項目を優先して学ぶべきであると感じるため。
- ⑤：その他。

3. 6 研修等でLGBTについて取り扱う意義に対する意識の実態

教育に携わる上で研修等においてLGBTに関する項目を取り扱う必要性を感じている学生は88%と、高い割合となった。また、その理由を尋ねる問いに対しては、「当事者である児童・生徒に適切な支援や配慮を行うため。」という回答が最も高い割合を占め、83%であった。さらに、必要性を感じないという回答の理由を尋ねる問いに対しては、「LGBTよりも重要な項目を優先するべきだと感じるため。」という回答が68%あり、大学において学ぶ意義の回答と同様に最も高い割合を占めた。

3. 7 教育実習における経験とLGBTとの関連

教育実習を通してLGBTに対する考え方が変わったと回答した学生は3%であった。そのうちの自由記述を見ると、当事者の児童・生徒と出会うことで考え方が変わった学生がいる一方で、同性愛について揶揄する児童・生徒の姿勢を目の当たりにすることで問題意識が高まった学生もいる様子もうかがえた。

3. 8 教育現場におけるLGBTの取り扱いに対する意識の実態

子どもたちがLGBTについて学び始めるのにふさわしい時期としては、「小学校高学年」という回答が33%と最も高く、次いで「中学校」という回答が27%となり、思春期や性教育の開始を意識する学生が多く存在することが垣間見えた(図14)。また、授業や学級経営においてLGBTについて取り扱う必要性を感じている学生は82%であった。そのうち、とりわけ道徳や保健体育の授業において取り扱うべきであるという回答が多く見られ、人権教育や性教育と関連付けて教える必要があると感じる学生が多く存在することがうかがえた(図15)。さらに、教員としてLGBTについて正しく取り扱う自信はあるかを尋ねる問いに対しては、「あまり自信がない」という回答が69%と最も高い割合を占め、教育現場においてLGBTについて取り扱う意義を感じていながらも、実際の場面を想定した際に不安を抱える学生が多く存在することが示唆された(図16)。

子どもたちがLGBTについて学び始める時期として最もふさわしいのはいつ頃か。(n=132)

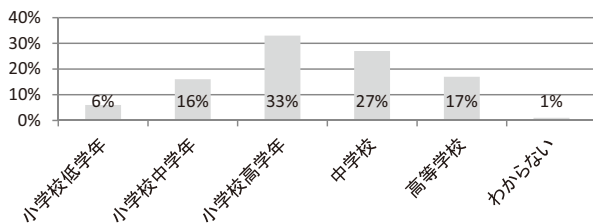


図14 LGBTを学ぶのに適切な学年

どのような科目・領域でLGBTを取り扱うべきか。(n=99)

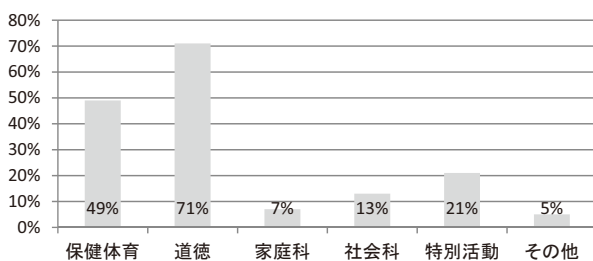


図15 LGBTを取り扱うべき科目・領域

教員として、LGBTについて正しく取り扱う自信はあるか。(n=84)

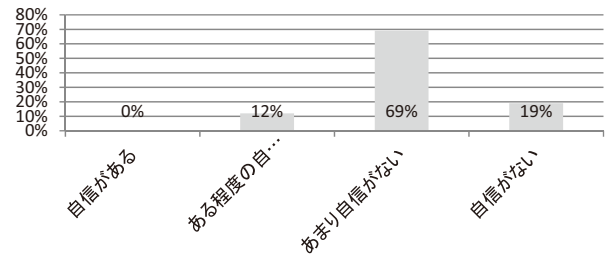


図16 授業でLGBTを採りあげる自信

3. 9 カミングアウトを受けた際の対応の想定

LGBT当事者の児童・生徒からカミングアウトを受けた際にどのように対応するべきかを尋ねる問いに対して、最も高い回答率となったのは「その児童・生徒から十分に話を聞く。」であり、94%であった。次いで高い回答率となったのは「LGBTについて情報収集を行う。」であり、75%であった。これらの結果を見ると、当該児童・生徒のカミングアウトの理由や抱える困難を十分に把握し、正しい知識や情報を与えることにより支援につなげようとする姿勢がうかがえる(図17)。しかし、当事者の児童・生徒からカミングアウトを受けた際には、薬師ら(2014)が指摘するように、第三者への意図しないカミングアウトとなる「アウトティング」とならないよう留意すべき点も検討が必要となる。

教員あるいは教育に関わる専門職になった後、LGBTの児童・生徒からカミングアウトを受けたらどのように対応するべきか。(n=130)

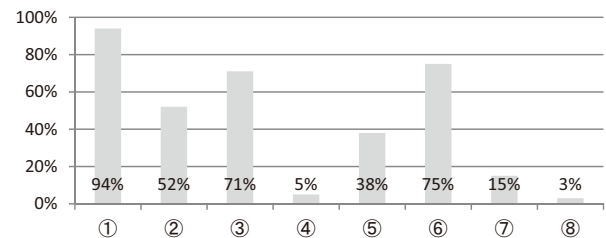


図17 カミングアウトへの対応

<選択肢>

- ①: その児童・生徒から十分に話を聞く。
- ②: 管理職や学年主任等に相談する。
- ③: 養護教諭やスクールカウンセラーに相談する。
- ④: 保護者にその旨を伝え、当事者への対応をその保護者に任せる。
- ⑤: 保護者にその旨を伝え、その保護者と一緒に対応策を考える。

- ⑥：LGBTについて情報収集を行う。
- ⑦：成人したLGBT当事者を呼び、ロールモデルを示す。
- ⑧：その他。

4. 考察

今回の調査結果から将来、教育に携わる上で大学においてLGBTに関する正しい知識を身につける必要性を感じている学生が95%と非常に高い割合を示したのに対し、実際に大学の授業においてLGBTについてふれた経験のある学生は33%であって、いわば「学生側のニーズ」と「大学側の整備」の間に乖離が生じている現状がうかがえた。今後、教員養成を行う大学の講義・演習等にはLGBTに関する事項を必須内容として位置づける必要がある。

そのためにはそうした講義・演習等の実施・蓄積・共有をすすめながら(神村 2015)、どのような区分あるいは分野の授業においてLGBTに関する項目を導入するかを検討する必要がある。今回の調査において、LGBTについてふれた授業の多くは「選択科目」という区分であったが、今後「必修」の授業の中でLGBTについて取り扱われることになれば、将来教育に携わるあらゆる学生がLGBTに関する正しい情報に積極的に、そして能動的にふれる経験を持つことができよう。そのような経験を養成段階で経ることで、今回の調査において多くの学生が抱えていたような実際の教育現場でLGBTをめぐる問題と向き合う際の不安を軽減させることや、LGBT当事者の児童・生徒の存在に気づきやすくなることにつながる可能性があるといえる。さらには、今回の調査にて少数ではあるが存在したような、LGBTに関する項目を養成段階で学ぶ必要はないと感じる学生の意識を変えていく契機にもなるに違いない。

また、大学においてLGBTについて取り扱う場合、授業という場のみに限る必要はない。たとえば、学内で行われる講演会にてLGBTに関する項目を取り入れ、そこに当事者を招くことでロールモデルを示したり、学内の刊行誌にLGBTに関する記事を掲載したりと、さまざまな方法が考えられる。

いずれにせよ、将来教育に携わる上で児童・生徒に正しい情報を発信し、性の多様性を適切に伝えるためにも、教員養成課程に学ぶ学生にはLGBTに関する十分な知識を身につけることや、実際の教育現場におけるLGBTに関する項目の取り扱い方あるいは当事者の児童・生徒からカミングアウトを受けた際の適切な対

応や支援方法等について学んでおくことが求められるよう。

5. 今後の研究課題

本研究では、方法に記したような調査票の配布・回収の手続きをとったため、回収されたアンケートの専攻ごとの学生数に占める比率が大きく異なる、配布先の専攻も教科教育については社会科・家庭科・保健体育科の3専攻に限られている、教員養成系大学の学生とはいえ、社会福祉やカウンセリング専攻の学生も含めていることなど、調査研究として精緻なものとはなり得ていない。本稿を執筆するにあたって、専攻別の集計・比較も試みたが、収集データの偏りから回収されたアンケート全体の傾向分析にとどまらざるを得なかった。今後は教員養成系大学が擁する全専攻から比較分析に耐えるデータ数を収集する、今回の調査で知識・理解いずれも高い結果になることが示唆された、LGBT当事者の支援に携わる可能性の高い養護教育専攻、社会福祉専攻、カウンセリング専攻学生の特徴を明らかにする、知識・理解と志望する専門職の関係やカリキュラムとの関連を検討する、など多角的な検討が求められよう。自らの課題として引き受けると共に、本研究が学校教育と切り結ぶLGBT研究の広まりに少しでも貢献することを願ってやまない所である。

文献

- 奥村遼・加瀬進 (2016)：セクシュアルマイノリティに対する配慮及び支援に関する研究：学校教育現場に対する当事者のクレームを手がかりに、東京学芸大学紀要 総合教育科学系Ⅱ 第67集, 11-19.
- 数見隆生 (2011)：若者の性行動活発化と教員養成教育の必要性 ～日中の教員養成大学生の比較調査から～, セクシュアリティ (49), 42-49, エイデル研究所
- 加藤慶・渡辺大輔 (2012)：セクシュアルマイノリティをめぐる学校教育と支援 増補版～エンパワメントにつながるネットワークの構築にむけて～, 開成出版
- 神村早織 (2015)：教員養成系大学におけるジェンダーと教育に関する科目としての試み —「ジェンダーとセクシュアリティ」の授業から, 教育実践研究No. 9, 21-28, 大阪教育大学教職教育研究センター
- 寺町晋哉 (2012)：教員養成課程におけるジェンダーの視点導入の課題：学生の履修状況と「ジェンダーと教育」に対する認識から, 大阪大学教育学年報 17, 59-72.

電通コーポレート・コミュニケーション局広報部 (2015): 電通ダイバーシティ・ラボが「LGBT調査2015」を実施—LGBT市場規模を約5.9兆円と算出— dentsu NEWS RELEASE

<http://www.dentsu.co.jp/news/release/pdf-cms/2015041-0423.pdf>
(最終アクセス2016年1月30日)

内閣府 (2012): 自殺総合対策大綱～誰も自殺に追い込まれることのない社会の実現を目指して～ http://www8.cao.go.jp/jisatsutaisaku/taikou/index_20120828.html (最終アクセス2016年1月30日)

日高庸晴 (2000) ゲイ・バイセクシュアル男性の異性愛者的役割葛藤と精神的健康に関する研究, 思春期学 = ADOLESCENTOLOGY 18 (3), 264-272.

日高庸晴 (2005): REACH Online 2005 <http://www.gay-report.jp/2005/result02.html> (最終アクセス2016年1月30日)

日高庸晴 (2013): 個別施策層のインターネットによるモニタリング調査と教育・検査・臨床現場における予防・支援に関する研究 <http://www.health-issue.jp/f/> (最終アクセス2016年1月30日)

法務省・人権擁護局 (2015): 第67回人権週間12月4日(金)～10日(木) <http://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken03.html> (最終アクセス2016年1月30日)

薬師実芳・笹原千奈未・古堂達也・小川奈津己 (2014): LGBTってなんだろう?—からだの性・こころの性・好きになる性, 合同出版

7. 調査用紙
調査対象となる専攻によって若干異なるが、基本事項は共通である。以下は教科教育専攻用である。

LGBTに関するアンケート調査ご協力のお願い

東京学芸大学特別支援教育特別専攻科の奥村遥と申します。現在、修了論文執筆に向け、「LGBTと教育」をテーマとして研究を進めております。

LGBTとは、女性同性愛者であるレズビアン、男性同性愛者であるゲイ、両性愛者であるバイセクシュアル、性別違和を持つトランスジェンダーそれぞれが独自の類文字を取ったセクシュアルマイノリティの呼称であり、近年メディア等で頻りに取り上げられています。

そこで、本研究では、教育現場においてLGBTの児童・生徒に対して教員が行うべき適切な配慮や支援を明らかにすることを目的とし、教員養成課程に在籍する一般学生が持つLGBTに対する意識や認識の実態把握を行いたいと考えております。つきましては、皆さんにLGBTに関する以下の質問事項にお答えいただきたく、今回このようなアンケートを配布させていただきました。なお、本アンケート調査にて得られた情報は修了論文執筆の目的のみに使用します。

ご多忙の中、お手数をかけてしまい大変恐縮ではありますが、ご協力よろしくお願い致します。

(1)専攻： _____ (2)学年： _____ 年

1. LGBTという言葉を知っていますか。 (はい / いいえ)
※「いいえ」とお答えの方は、以降の質問には回答いただく必要はありません。
→「はい」とお答えの方にお聞きします。

(1) LGBTという言葉をどこで知りましたか。(複数回答可)
①テレビ ②雑誌 ③図書 ④高校までの授業 ⑤その他()

(2) LGBTという言葉をどの程度知っていますか。どれか1つまで○で願ってください。
① LGBTという4つのセクシュアリティがそれぞれ何を表すかを正しく説明できる。
② LGBTのうち、どれか1つでも正しく説明できる。一部説明できるものを選んでください。(L G B T)
③ 正しいかどうかは分からないが、LGBTという言葉がある程度簡単に説明できる。
④ LGBTという言葉を知っていることはあるが、説明できない。
⑤ その他()

2. あなたの家族や友人の中に、あるいは教員になったとして受け持った児童・生徒の中にLGBT当事者がいたらと思います。その当事者に対してあなたが持つと想定される感情やイメージについて、それぞれの空欄の中に、以下の形でお答えください。
【受け入れられる：◎ たぶん受け入れられる：○ 少し抵抗感がある：△ 抵抗感がある：×】

	家族	友人	児童・生徒
L (レズビアン)			
G (ゲイ)			
B (バイセクシュアル)			
T (トランスジェンダー)			

3. 今までLGBT当事者に出会う機会がありましたか。 (はい / いいえ)

→「はい」とお答えの方にお聞きします。

(1) どこで当事者と出会いましたか。(複数回答可)
①学校 ②セミナー・勉強会 ③その他()

(2) それは誰ですか。(複数回答可)
①家族 ②友人 ③教員 ④子ども ⑤その他()

(3) 当事者と出会ったとき、どう感じましたか。(複数回答可)
① その人とさらに仲良くなりたいと思った。
② その人の悩みの相談相手になりたいと思った。
③ LGBTについて調べて詳しく知ろうと思った。
④ その人とはあまり関わりたくないと感じた。
⑤ その他()

4. 大学入学後、あなたが受けた授業の中でLGBTについての授業はありましたか。(はい / いいえ)
→「はい」とお答えの方にお聞きします。

(1) その授業は必修科目ですか。選択科目ですか。 (必修 / 選択 / その他：)
(2) その授業の分野を選んでください。 (一般教養 / 専門科目 / その他：)
(3) その授業に最も近い資料専門等の領域を選んでください。
(保健体育 / 道徳 / 家庭科 / 社会科 / 特別支援教育 / カウンセリング / その他：)
(4) その授業を通して、LGBTに関する知識を得られましたか。
(得られた / ある程度得られた / あまり得られなかった / 得られなかった)
(5) その授業は、教員になるにあたって受けるべきものであると思いますか。
(思う / どちらかといえば思う / あまり思わない / 思わない)
(6) その授業を通して、LGBTに対する偏見や抵抗感はどうなりましたか。
(減った / どちらかといえば減った / 変わらなかった / それよりも増した)

5. 教員になるにあたり、学生のうちに大学でLGBTに関する正しい知識を身につける必要があると思いますか。(思う / 思わない)
→「思う」とお答えの方にお聞きします。

(1) その理由として最も近いものを1つ選んでください。
① 受け持つ児童・生徒の中に当事者がいる可能性があるため。
② いじめや人権問題に関わることであるため。
③ LGBTは学校教育の中で扱われるべき重要な問題であるため。
④ 教員はLGBTについて正しい知識を児童・生徒に伝えなければならないため。
⑤ その他()

→「思わない」とお答えの方にお聞きします。

(1) その理由として最も近いものを1つ選んでください。
① 受け持つ児童・生徒の中に当事者がいるとは限らないため。
② 教員になるにあたり、LGBTに関する知識は特に必要ではないため。
③ LGBTは学校教育の中で扱われるべき問題ではないと感じるため。

④ LGBTよりも重要な項目を優先して学ぶべきであると感じるため。
⑤ その他()

6. 教員になった後、研修等の場においてLGBTに関する項目は取り扱われるべきだと思いますか。
(思う / 思わない)
→「思う」とお答えの方にお聞きします。

(1) その理由として最も近いものを1つ選んでください。
① 当事者である児童・生徒に適切な配慮や支援を行うため。
② LGBTをめぐる問題は現在の教育現場において重要な問題であるため。
③ 教員になってからもLGBTについて学ぶ機会を提供してほしいと感じるため。
④ その他()

→「思わない」とお答えの方にお聞きします。

(1) その理由として最も近いものを1つ選んでください。
① 当事者である児童・生徒を必ずしも受け持つとは限らないため。
② 教員として働く上で、LGBTに関する知識は特に必要ではないと感じるため。
③ LGBTよりも重要な項目を優先すべきだと感じるため。
④ その他()

7. 教育実習を通して、LGBTに対する考え方は変わりましたか。
(はい / いいえ / 教育実習を行っていない)
→「はい」とお答えの方にお聞きします。

(1) それは基礎実習と応用実習、どちらを通してですか。 (基礎 / 応用)
(2) 差し支えなければ、具体的なエピソードと、考え方がどのように変わったかを記入ください。

8. 子どもたちがLGBTについて学び始める時期として最もふさわしいのはいつ頃だと思いますか。
あてはまる校種を1つ選んでください。
①小学校低学年 ②小学校中学年 ③小学校高学年 ④中学校 ⑤高等学校
⑥その他()
→その理由がありましたら、ご記入ください。

5. 教員になった後、あなたは授業や学級経営等において、LGBTについて取り扱うべきだと思いますか。
(思う / 思わない)
→「思う」とお答えの方にお聞きします。

(1) のような場でLGBTについて取り扱うべきだと思いますか。(複数回答可)
①保健体育 ②道徳 ③家庭科 ④社会科 ⑤特別活動 ⑥その他()

(2) 教員として、LGBTについて正しく取り扱う自信はありますか。
(自信がある / ある程度の自信がある / あまり自信がない / 自信がない)

→「思わない」とお答えの方にお聞きします。

(1) 差し支えなければ、その理由をご記入ください。

10. 教員になった後、LGBTの児童・生徒からカミングアウトを受けたらどのように対応すべきだと思いますか。(複数回答可)

① その児童・生徒から十分に話を聞く。
② 管理職や学年主任等に相談する。
③ 養護教諭やスクールカウンセラーに相談する。
④ 保護者にその旨を伝え、当事者への対応をその保護者に任せる。
⑤ 保護者にその旨を伝え、その保護者と一緒に対応策を考える。
⑥ LGBTについて情報収集を行う。
⑦ 成人したLGBT当事者を呼び、ロールモデルを示す。
⑧ その他()

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

教員養成系大学生が有する LGBT の
知識・理解・学習経験に関する調査研究

— T大学におけるアンケート調査を手がかりに —

Research on the Knowledge, Understanding and Learning Experience of LGBT
among the Students in the Teacher Training University:

Through a Questionnaire Survey at T-university

奥村 遼*¹・加瀬 進*²

Ryo OKUMURA and Susumu KASE

特別ニーズ教育分野

Abstract

The purpose of this study is to clarify the actual situation and trends of knowledge , understanding and learning experience of LGBT among the undergraduate students in the teacher training university . We have conducted a questionnaire survey for the students of “ T” teacher training university. The number of valid responses is 147 .

The main results are as follows.

1. 60 % of them are aware of the term LGBT, of which, 8% students can not explain the term.
2. The highest case tolerance of LGBT is not "family ", "friend" but "pupils. However, about 10% of them have a sense of resistance for LGBT pupils.
3. While the 95 % students have the need to wear the correct knowledge of the LGBT, the students with experience learned LGBT in university classes are only 33 %..
4. 90% of the students answered that can not have the confidence to handle correctly the LBGT as a teacher.

From the above results, we must reform the teacher training university to provide an environment in which students are always able to learn about LGBT.

Keywords: sexual minority, LGBT, teacher training university

Department of Special Needs Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 本研究は、教員養成系大学生が有する LGBT の知識・理解・学習経験の実態や傾向を明らかにすることと目的とし、T教員養成大学の学部生を対象にアンケート調査を実施した。有効回答数は147名である。主な結果は次の通りである。

- ① 60%の学生が LGBT という用語を知っており、その内、用語を説明できない学生は8%であった。

*1 Tokyo Takashima Special Needs Education School (3-7-2, Takashimadaira, Itabashi-ku, Tokyo, 175-0082, Japan)

*2 Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

- ② LGBTの許容度は「家族」,「友人」よりも「児童・生徒」にいる場合が最も高いが, その場合でも10%程度の学生が抵抗感を有している。
- ③ LGBTに関する正しい知識を身につける必要性を感じている学生は95%である一方, 大学の授業においてLGBTに関する学習経験を有する学生は33%のみであった。
- ④ 90%の学生が, 教員としてLGBTについて正しく取り扱う自信がないと感じている。

以上の結果から, 今後, 教員養成を行う大学の講義・演習等にはLGBTに関する事項を必須内容として位置づける必要がある。

キーワード: セクシュアルマイノリティ, LGBT, 教員養成大学